
インフィニット・ストラトス～覇王～

ウィング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス（覇王）

【Nコード】

N3474BA

【作者名】

ウイング

【あらすじ】

男でISを動かせるのは織斑一夏だけでは無かった、その人物はイタリアの代表候補生で彼の三人目の幼馴染だった。彼等二人がIS学園で繰り広げる物語が始まりを迎えたのだ。

プロローグ

ここはイタリアにあるＩＳ関連で一番大きな会社『テストロッサ社』のある部屋

カタカタ・・・カチカチ・・・

キーボードを打つ音とマウスをクリックする音しか聞こえなかった

「ん・・・こうすると拡張領域バススロットの容量が減っちゃうな・・・でも
こうした方が扱い易くなるんだけど」

コンコン

「どうぞ」

ドアが開くとそこには金髪の女性『フェイト・テストロッサ』が立っていた

「ん？如何したのお母さん？」

「そろそろ時間だよ、準備出来てる？」

「うん・・・」

少年の顔はいきなり憂鬱だと言う顔をしていた

「どうかしたの？」

「いや、ちょっと・・・男一人だと耐えられるかどうか」

「あれ？ニュース見てないの？」

「ニュース？」

近くに有ったりリモコンでテレビの電源をオンにする

《こんにちはわ、ニュースの時間です》

《それでは今日の話題は世界初の男性IS操縦者についてです》

「あれ、これ僕の事だよね？」

そう、少年『ライト・テストロッサ』は研究中にISを動かしてしまい世界初の男性IS操縦者になったのだ

「そうだけど、見て」

再びテレビに視線を戻す

《イタリアに現れたって子でしょう？だったらもうみんな知ってるんじゃないの？》

《そうなんですけど、実は日本にも現れたって言うんですよ》

「マジで！やった！僕一人じゃなかったんだ！」

「よかったね」

「うん、これで心置きなく学園 n 《名前は確か、織斑一夏君だったね?》・・・はい?」

画面をよく観ると一人の少年の顔写真が映し出され、下の方には『織斑一夏』と書かれていた

「・・・一夏!?!?」

こうして少年は I S 学園に入学することになった

プロローグ（後書き）

つい勢いで書いてしまった・・・

- ・ 他の作者の作品を見ていたら書きたくなった自分を殴りたいです・・・

でもどうか、温かい目で見守ってください。

設定

名前

ライト・テストロッサ

身長

153cm

性別

男・・・？

ライト

「男だよ！」

容姿

平均より少し可愛い顔つき、髪は金髪に近い茶色で肩までの長さ、目は大きめで金と銀のオッドアイ

備考

七歳の時に両親の存在を知らず、天涯孤独の状態でなのはに拾われ保護責任者として育てられた。その後学校に通いだし、一夏と鈴と

出会った。

中学入学前にイタリアに引っ越してしまい、フェイトの手伝いをしているとうっかりISに触ってしまい動かしてしまった。

専用機 霸王

第四世代（表向きは第三世代）

外見は百式の一次形態移行前の姿、ファースト・シフトはするが姿が変わっておらず本人自身も首を傾げている

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力 ???

装備 一切無し

設定（後書き）

主人公の声は阿澄佳奈さんでご想像ください。

一話

IS学園、それは日本に設立されたIS操縦者を育てるための学校であり、何処にも所属しない国とも言われている。

「みなさん入学おめでとう、私は副担任の山田真耶です」

みんな先生の方には見向きもせずにライトと一夏を見ている

「えっ、ええ・・・じゃっ、じゃあ自己紹介をお願いします、出席番号順で・・・織斑君？」

一夏の名前を呼ぶが一夏は反応しておらず、呼ばれている事自体に気付いていなかった

「一夏、呼ばれてるよ（小声）」

「は、はいっ！」

ライトが一夏に声をかけると一夏は慌てて立ち上がった、周りから笑い声が聞こえる

「あの、大声出しちゃってごめんなさい、でも『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね、自己紹介をしてもらってもいいかな？だめかな？」

「あっいえ、そんなに謝らなくても・・・ええ・・・織斑一夏です、よろしくお願いします」

(・・・えっ、あれだけ?)

一夏の自己紹介に首をかしげるライト、すると女子たちの視線が一夏の方に向く

(やばい、ここで黙ったままだと、暗い奴のレッテルを貼られてしまう!)

一夏は呼吸を整えると

「以上です！」

すると周りの女子たちがこけ始めた

「えっ、あれ？ダメでした・・・グウ!？」

突然一夏の姉『織斑千冬』が現れ、一夏の頭を殴った

（あれ？千冬さん？）

「げっ、千冬姉!？」

再び頭を殴られた

「学校では織斑先生だ」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君クラスの挨拶を押し付けてすまなかったな」

（何で千冬姉がいるんだ、職業不詳で、月に一、二回しか家に帰ってこない俺の実の姉が・・・）

一夏がそんな事を考えていると、千冬は教壇に立ち

「諸君、私が担任の織斑千冬だ、君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

静まり返った教室が忽ち黄色い声が響き渡った

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

「毎年よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ、私のクラスだけに集中させているのか？」

（うわー、人気だな千冬さん・・・みんな千冬さんに憧れて来たんだ、あれかな？憧れがそばに有ると伸びやすくなるって事なのかな？みんなやっぱり真剣にISの事を・・・）

ライトがそう感心していると

「お姉さま！もっと叱って罵ってえ！」

「そして、つけ上がらないように躑をしてゝ！」

（・・・前言撤回します）

「おい、テストロッサ」

「はっはい！」

突然千冬に名前を呼ばれ、少し慌てる

「時間がないから、早く自己紹介をしろ」

（あれ？順番って出席番号順じゃなかったっけ？まあいいや）

ライトは机から立ち上がる

「僕はライト・テストロッサです、皆さんと仲良くやれたらいいな
と思っていますので、よろしくお願いします」

自己紹介が終わると、「僕っ娘!?!可愛い!」という声があちこちから聞こえる

「あつ、えつと・・・勘違いされてるみたいですけど、僕は男です」

その後教室の空気が凍りついた

「あつ、あれ？」

「」「」「男の娘キターーーーー!!!!」「」「」

「カッコイイ織斑君と可愛いライトきゅん!もう私死んでもいい!」

(きゅん!?!君じゃなくて!?!?)

「お持ち帰りしたい!!」

(どこに!?!そして持ち帰った後どうする気!?!?)

「・・・」

一夏はライトの顔をじーっと見ている

「ライト？お前ライトか！」

「って遅っ！今気付いたの！？」

「なんだよお前、全然変わってないじゃないか、特に身長が・・・」

「そりゃあ、僕は昔から一夏よりちっちゃいし・・・ってちっちゃくないよ！こう見えても150行っただからね！」

「俺170行っただぞ？」

「・・・」

ライトは今にも泣きそうな顔をしていた

「」「」「グハッ！」「」「」

女子達の鼻から赤い液体が溢れだした

「かつ、可愛い・・・」

「これが萌えという奴なのですか・・・」

それから時は過ぎ、SHRが終わり、休み時間

「にしても久しぶりだなライト」

「うん、何年ぶりになるんだろう？」

「中学になる前だったから・・・丁度三年ぶりになるのかな？」

「長いようで短いね、所で鈴は如何してるの？」

「あっ、そうかお前知らなかったな？鈴の奴、中二の始めあたりで転校しちゃったんだ」

「そうなの！・・・ん？」

ライトは一夏の後ろを見た、それにつられて一夏も振り向くと『篠ノ之箒』が立っていた

「箒？」

「ちょっといいか？」

「おう、悪いライト、ちょっと行って来るな」

「待って、僕も行っていいかな？二人の邪魔ならしないから」

「・・・別に構わん」

「ありがとう、えっと・・・」

「篠ノ之箒だ」

「えっと、ライト・テストロッサです」

場所が変わり、今三人は屋上に来ている（ライトは二人より少し離れた場所に居る）

（ふー、危なかった・・・あのまま一人であそこにいたら、僕如何なってたか・・・）

「・・・・・・」

（何も喋らないな、話があったんじゃないのかな？）

「六年ぶりに会ったんだ、なんか話があるんだろ？」

「うっ、うん・・・」

（もしかして篠ノ之さん、一夏の事・・・）

「あっそう言えば、剣道の大会、優勝おめでとう」

「なっ、何で知ってるんだ！」

「何でって、新聞で見たから」

「何で新聞なんてみているんだ・・・」

「ああそれと、六年ぶりだったけど、箒だっけすぐ分かったぜ」

「えっ・・・」

「ほら、髪型一緒だし」

「よっ、よく覚えていたな」

「忘れるわけねえよ、幼馴染だからな」

「そっ、そうか」

キーンコーン カーンコーン

「そろそろ戻るか」

「あつ、ああ・・・」

（あつ、終わったのかな？）

三人は教室に戻った

一話（後書き）

長くなりそうなので一旦ここまでです。

次回はあのイギリスお嬢様の登場です。

二話

現在一夏達はISの基礎を勉強中である、そんな中一夏は・・・

（このアクティブなんちゃらか、広域うんたらとかどう言う意味なんだ、まさか全部覚えないといけないのか・・・）

この様に頭を抱えていた

「織斑君どうかしました？」

真耶が頭を抱えている一夏に話しかける

「質問があったら聞いて下さいね？なにせ私は先生ですから」

真耶がそう言う和一夏は手を挙げる

「先生・・・」

「はい、織斑君！」

「殆ど全然分かりません・・・（汗）」

「ぜっ、全部ですか！？テストロッサ君は・・・」

織斑はライトの方を向く

「大丈夫です、一応理解はしてますので」

「なっ！お前分かるのか！？」

「うん、IS関連の会社で働いてたから」

そんなやり取りをしていると千冬が一夏の近くに寄ってきた

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「えー、あっ！あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろ？」

「・・・間違えて捨てます」

ドゴッ！

一夏のこめかみに千冬の出席簿が放たれた

（今の、出席簿じゃ鳴らない音だね・・・）

ライトは心の中でそんなツツコミをしていた

「後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ、いいな？」

「いや！一週間であの厚さはちよっと・・・」

「やれと言っている」

「はい、やります・・・」

「では、授業を続けますね？テキストの・・・」

そうして授業は終わり、現在休み時間

「大丈夫一夏？僕で良かったら勉強手伝うよ？」

「マジか！それは助かる！」

「ちょっとよろしくて？」

二人は突然話しかけられる

「「んあ？（はい、何ですか？）」「」

「まあ！なんですのそのお返事！私に話し掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのでないかしら？」

ブロンドの髪をした少女は一夏に向かって言う

「悪いな、君が誰だか知らないし・・・」

「私を知らない！セシリア・オルコットを！？」

少女は怒りが混じった声を上げる

「僕は知ってるよ、セシリア・オルコットさん、イギリスの代表候補生でしょ？」

「そう！そして入試主席ですわ！」

「あつ、質問いいか？」

「ふんっ、下々の者の要求を聞くのも貴族の務めですわ、よろしくてよ！」

「……………代表候補生って、何？」

その言葉にライトとセシリアを除くクラスメイト全員がこけた、セシリアに関しては硬直していた

「一夏、代表候補生って言うのはその国のIS操縦者を代表する候補生、つまりエリートだね」

「そう、エリートですわ！本来なら、私達のような選ばれた者と同じクラスになる事だけでも奇跡！幸運なのよ、その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、そいつはラッキーだな・・・達？」

一夏はセシリアが言った『私達』の部分に注目した

「あら？ご存知でないのかしら、そちらの方も代表候補生ですわよ？」

セシリアはライトを指差す

「何！そうなのか！？」

「うん、一応イタリアの代表候補生って事になっているけど」

二人を話をしているのにも関わらず、セシリアは話を続ける

「大体、何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね？唯一男でISを操縦ができると聞いていましたが、期待外れですわね」

「ライトは兎も角、俺に何かを期待されても困るんだが・・・」

「まあでも、私は優秀ですからあなたの様な人間にも優しくしてあげますわよ？ 分からない事があれば、まあ泣いて頼まれたら教えてあげてもよくってよ？」

「別にいい、ライトに教えてもらうからな」

「なっ！ 私は入試で唯一教官を倒したんですよ！」

「教官？ なら俺も倒したぞ」

「僕も倒したよ？」

「ハアッ!？」

「倒したって言うか、いきなり突っ込んで来たのを躲したら、壁にぶつかって動かなくなっただけど・・・」

「私だけと聞きましたが・・・」

セシリアは余りの事に物凄く動揺していた

「女子ではってオチじゃないのか？」

そこに一夏が止めを刺した

「あなた！あなたも教官を倒したというの！」

「まっまあ、落ち着けて！」

「これが落ち着いていられm・・・」

キーンコーン カーンコーン

「話の続きはまた改めて、よろしいですわね！」

そう言ってその場を去った

「所でお前はどうかやって倒したんだ？」

「僕はカウンターをした後、ラッシュを数発で止めに・・・」

「まさかアレを使ったのか!？」

「えっ、不味かった？」

「不味いも何も、お前のそれは……あゝ、ご愁傷様だ……良くて病院、悪くて……アーメン」

一夏は目の前で十字架を作る

(
(
(
(
(二
体何なのアレって!)
)
)
)
)

「まあいいや、それじゃあなライト」

「えっ、一緒に帰らないの？ウチの学校全寮制だよ？」

「いや、俺は暫く家からの通学することになってんだ」

「あつ、織斑君！その事なんですけど」

真耶は一夏に鍵を渡す

「織斑君の入学が余りにも突然すぎでしたので、部屋が用意できなかったんですが・・・」

「政府からの命令でな、すぐにお前を寮に入れろとな」

真耶の言葉に千冬が続く

「荷物なら心配するな、私が持って来てやった、着替えと携帯があれば充分だろ？」

「あつ、はい・・・」

そんなこんなで一夏は今、寮の廊下にいた

「えっと、1205号室か・・・でも何でライトと違う部屋なんだろうな？」

「僕の方がIS動かしたのが早かったから、多分すぐに用意できたんだと思う」

「そうか・・・ん？」

一夏はドアノブを握って立っていた

「如何したの？」

「ドアが、開いてる・・・」

「・・・一夏、心配しなくても骨は拾ってあげるよ」

「俺死ぬの前提なのか!？」

「運が悪ければね・・・」

「ちつくしょう！こうなったらやってやる！」

そう言いながら部屋に入って行った

「まっ、何かあったら匿ってあげようかな？1024号室か」

ライトも自分の部屋に入った

「あっ、よかった一人部屋だ」

ライトの部屋にはベットが一つしか置かれてない為、一人部屋だと言う事が分かる

「でも一人だと何だか寂しいな・・・」

『うわっ！待て箒、話せば分かる！』

『うるさい!』

『ぎゃあああ!』

「・・・やっぱり一人部屋でいいや」

翌日

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出場する代表者を決めて思う、クラス代表とは対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会の出席などに参加してもらう、まあクラス長と考えてもらっていい、自薦他薦は問わない、誰か居ないか?」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私はテストロッサ君を！」

「他にはいないか、いないならこの二人から決めるぞ？」

「ちょっと待った！俺はそんなY「納得がいきませんわ！」ハッ？」

「男がクラス代表なんて言い恥晒しですわ、このセシリア・オルコットにそんな屈辱を1年も私に味わえと言うんですの！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないだけでも私に耐え難い苦痛で・・・」

「イギリスだって大してお国自慢ないんじゃないか？世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ、おいしい料理は沢山ありますわ！そうですわよねえ！？」

ライトの方を向くセシリア

（何で僕に振るかな・・・）

「お隣とは行きませんが、ご近所なんですから分かりますよね？」

（確かにそうだね、地図的にはフランスやドイツとかの方が近いけど・・・）

「ライト、2年間だけが日本にいたんだ、イギリスよりいい所あるよな！」

（いつ、一夏まで・・・）

遂には一夏までライトに話を振り始めた

「こうなったら決闘ですわ！」

「おう、四の五の言うより分かりやすい！」

そして話し合いの結果、一週間後にクラス代表を決めるための戦いをする事になった

（ハア・・・何でこうなったんだろう？）

二話（後書き）

はい、状況的に一話が終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3474ba/>

インフィニット・ストラトス～覇王～

2012年1月15日01時45分発行